（様式**6**）

戸　谷　幸　佳　氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題　目　　Development, Validity, and Reliability of a Japanese Version of End-of-Life in Dementia Scales
（日本語版 End-of-Life in Dementia Scales の開発と信頼性妥当性の検証）
THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL（in press）
Sayaka Toya, Yoko Uchida, Tsuneo Yamazaki, Tomoyuki Saito, Yuhei Chiba, Tomoyuki Kawashima, Yukari Takai, Haruyasu Yamaguchi

論文の要旨及び判定理由

世界の認知症の人の人数は2030年までに7800万人に達すると言われ、認知症の人は増加の一途をたどっている。認知症の終末期にはエンドオブライフケアが必要であり、その質的向上が求められている。質的向上のためには、エンドオブライフケアを客観的に評価する尺度が必要である。米国では、高齢者介護施設における重度の認知症の人のエンドオブライフケアを評価する尺度であるthe End-of-Life in Dementia scales(EOLD)が存在し、他言語にも翻訳されている。日本では認知症の人へのエンドオブライフケアを評価する尺度で、信頼性・妥当性が検証されたものは知られていない。本研究では、日本語版EOLD（EOLD-J）を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。EOLD開発者Volicer氏に許可を得て、また、過去にEOLDを和訳した齋藤らの同意を得て、齋藤らが和訳した尺度を基に高齢者ケアの専門家と英語教育の専門家の意見を踏まえ検討し、日本の高齢者施設で使用内容な内容に一部改変し、EOLD-Jを作成した。高齢者施設でエンドオブライフケアを受けた認知症高齢者の遺族113名、そのエンドオブライフケアを実施した看護職員113名を対象に、EOLD-Jの信頼性と妥当性を検証した。83名（74.3%）の遺族、62名（54.9%）の看護職員から有効回答が得られた。EOLD-Jは、EOLDと同様に、１）満足度（Satisfaction with Care at EOLD：SWC-EOLD）、２）症状コントロール（Symptom Management at EOLD：SM-EOLD）、３）安楽（Comfort Assessment in Dying with Dementia：CAD-EOLD）の３つの要素から評価を行う。本研究の結果より、EOLD-Jの３つの要素について概ね内的整合性と収束的妥当性が確認された。因子分析において、症状コントロール（SM-EOLD）と安楽（CAD-EOLD）については、オリジナルのEOLDとは異なる因子構造を示し、構造的妥当性について今後更なる検証が必要であることが明らかになった。本研究により開発されたEOLD-Jを活用することにより、認知症の人へのエンドオブライフケアが客観的に評価され、エンドオブライフケアの質的向上に寄与することが期待される。したがって、本研究は今後の看護学の発展に寄与するものと認められ、博士（看護学）の学位に値するものと判定した。

（令和４年11月10日）

審査委員

主査　　群馬大学大学院教授
看護学講座　　大　山　良　雄　　印

副査　　群馬大学大学院教授
看護学講座　　金 泉　志 保 美　　印

副査　　群馬大学大学院教授
看護学講座　　岡　　美 智 代　　印

参考論文

1. 看取りケアを実施している特別養護老人ホームの特徴
インターナショナル Nursing Care Research 15: 123-132, 2016
戸谷幸佳、内田陽子、田中志子
2. 高齢者向け住まいにおけるACP支援EOLCパスの開発と有用性
-実施率と必要性の検討-
群馬保健学研究 40: 8-17, 2020
戸谷幸佳、梨木恵実子、吉田恭子、内田陽子